

序章 子どもの生命性と有能性を育てるために

—「コラボレーション」という枢軸をたよりとして—

京都大学教育学研究科・心理臨床学講座・教授

教育実践コラボレーション・センター長

桑原知子

はじめに

このたび、教育実践コラボレーション・センター（以下コラボレーションセンター）から「報告書」を出すことになりました。「報告書」というには、あまりにも大部の、中身のつまった本書は、コラボレーションセンターにおいて活動してきた本研究科の教員、院生からの、想いのこもった「発信」です。

本学の教育学研究科・教育学部は、学校教育にとどまらず、広い意味での、教え、学び、育て、育つという、人間にとって重要な営みに関わる教育と研究に携わっています。学校現場をはじめとした「フィールド」でおこっていることがらにも、強く深い関心を示しており、机上の空論にとどまることなく、現場での実践に深く関わりながら研究を進めてまいりました。もちろん、たとえば、いじめや不登校など、学校におけるさまざまな「問題」にも深い関心と憂慮をもっておりますが、それに対して、表面的な対処策を講じるのではなく、そうした現象がおこってくる背景に迫り、そうした現象の根底にあるものに切り込んでいこうとしているのです。

さらに、私たちは、こうした「問題」に対して、嘆いたり、「昔はよかった…」といった、愚痴や批判に耽溺するような態度に終始してはおりません。こうした現象を引き起こしているのは、「今、ここ」に生きている私たち自身であり、私たちは、そうした現象と無縁ではないのです。そのため、(広い意味での)「教育」においておこっている事柄について、自らのこととして引きうけ、真剣に議論し、探究しています。そのなかでこそ、「これからどうしていけばいいのか」という、未来志向的な発想が生まれてくるのだと、私は思います。

そんななかから、「子どもの生命性と有能性を育てる」という発想が生まれてきました。

これは、子どもをめぐる教育問題の中心を、「生命性を深めること」(心の問題)と「有能性を高めること」(学力問題)という2つの軸として取り出し、そのトータルな育成の方法を探ろうとするものです。また、これを推進するために、教育学研究科としては、教育研究におけるマクロ的アプローチ(教育制度学や教育社会学や比較教育学)とミクロ的アプローチ(認知心理学や心理臨床学や教育哲学)を統合しつつ研究を進めてきました。

「生命性と有能性」「マクロとミクロ」など、これまでともすれば対立したり、分断され

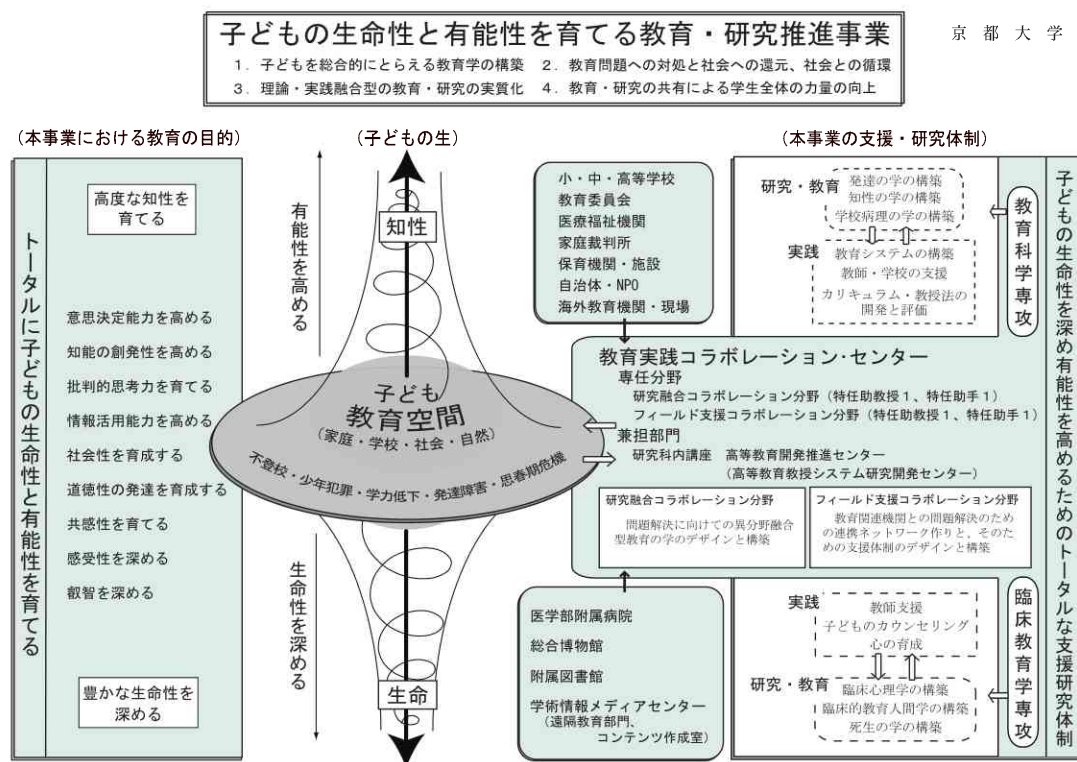
てきた事柄の「コラボレーション」を通じて、子どもの全体性を捉え、複雑で困難な教育問題の解決に真に寄与しようと考えたのです。

1 教育実践コラボレーション・センターについて

ここであらためてコラボレーションセンターの全体像について、紹介しておきたいと
 思います。（詳しくは、ホームページをご覧ください）

http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/files/main_purpose.html

下図に示すように、コラボレーションセンターは、さまざまなフィールドと結びついて
 います。また、教育学研究科は、「教育科学専攻」と「臨床教育学専攻」という、まさに「有
 能性」と「生命性」とに対応した2専攻から成っており、こうしたコラボレーションを支
 える土壌があることがわかっていただけたと思います。



教育学研究科では、平成 19 年度から、新しいプロジェクト「子どもの生命性と有能性を
 を育てる教育・研究推進事業」(平成 19 年度から平成 23 年度)が立ち上げられ、教育実

実践コラボレーション・センターとして、さまざまな活動をおこなってまいりました。「事業」としての期間は平成 23 年に完了し、24 年度からは、試みではなく、日常的な実践としてその活動を行っていくことになりました。つまり、これまでに築かれてきたさまざまな関係性をそのまま継承し、一過性の試みに終わることなく根付かせていくという仕事にシフトしたわけです。

2 コラボレーションセンターの「成果」

本報告書は、これまでにコラボレーションセンターがおこなってきた事柄の成果でもあります。コラボレーションセンターの「成果」は、目にみえるなにか、ではないように思います。残され、根付いてきたのは、関わってきた人たちの間に生じた「関係」であり、そこに生じた新しい「発想」や「視点」ではないかと思うのです。

たとえば、偉業を成し遂げた人の「成果」は、その人の残した業績や、あるいは、銅像などといったもので、残されることがあります。しかし、私たちのような、人のこころや教育に関わるものが残す「成果」は、関わってきた人のこころに残されるものであり、(一般的な意味での) 科学における発見などとは、異なった性質のものです。

したがって、本報告書にあるのは、そうした「成果」の痕跡であったり、発想のヒントであるかもしれません。一見、あまりにも多方面に広がり、一貫した方向性がないようにみえる本報告書ですが、関わってきた人たちにとっては、「馴染み」のあるものであり、「成果」として、こころに収まっていくことと思います。

今回は、このコラボレーションセンターの活動に関わっていない人にとっても、この「成果」が伝わってほしい、とも思っています。そのため、今回の報告書において展開されている事柄について、簡単な「紹介」をしようと思います。それによって、少しでも多くの人に、本報告書にまとめられた「成果」が伝わることを願っています。

3 本報告書の「サイトマップ」

さまざまな方向性から執筆され、考察されている本報告書ですが、通底しているのは、コラボレーションセンターのテーマである、「子どもの生命性と有能性を育てる」にはどのようにすればいいのか、という問題意識です。

まず、矢野智司は、『生命性と有能性の教育に向けて』と題して、「子どもに生命性を生み出す体験」について述べています。ここでいう、「体験」は「経験」とは異なるものです。矢野は、「従来の教育学における『生活』の概念は、『経験』の概念によって一次的に説

明されることが多かったですが、ここでは『生活（生）』をこの『経験』と『体験』の両方によって生みだされるダイナミズムとして、とらえていくことになります。そうすることで、教育を社会的な有能性を高めること（発達）ともに、生命性を深めること（生成）の2つの次元でとらえてみたい」と言っています。そして、「人間が人間であるかぎり、有能性と生命性とはたがいにかたがたに他を必要としています。生きていくうえでの両輪です。能力が高くなればなるほど、優れたメディアによって比類なく深い生命の世界に開かれます。生命性へのあこがれが高い有能性をもたらします。人生とはその大きなダイナミズムを生きることです」と述べるのです。

一方で、田中耕治は、「確かな学力」について、考察しています。彼は、日本の教育の歩みを学力問題を軸にしてみたとき、およそ 25 年周期で教育課程行政が大きく転換していることを指摘しています。彼は、最近の学力問題にインパクトを与えている PISA 型読解力の問題や、学力と深くつながる「評価」の問題に触れながら、「確かな学力」という日本の教育が目指してきたものの特徴と課題について丁寧に述べています。

続いて、西岡加名恵は、毎年続けられている、教育研修実践である「E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修の試み」について、報告しています。西岡は、「子どもたちの有能性と生命性をともに育成するような学校を実現するためには、そのような学校を生み出す教育改革の担い手である教師たちの育成・力量向上が欠かせません。その際には、教師たち自身の有能性と生命性を育むような研修が必要とされていると言えるでしょう」と述べていますが、子どもたちを育てるためには、教師を育成することが大切だという指摘は、忘れてはならない点でしょう。E.FORUM の実践においては、参加者にアンケートをとっているのですが、その中に、こんなことが書かれていました。「内容が多種多様でバラエティーに富んでいるようで、根底にあるものはすべて同じで、とても大事なことだったと思います」。西岡も述べるように、これは、「有能性と生命性の保障を同時にめざすという教育実践コラボレーション・センターの理念が、参加者にも届いていることを示しているものと言えるのではないのでしょうか」。

趙卿我は、『韓国における教育評価改革の変遷』について、論述しています。教育実践コラボセンターの活動は、日本国内にとどまりません。特に、中国・韓国を中心とした東アジア地域における教育を比較検討しながら、日本の教育制度についての理解を深め、また、院生の相互交流を通じて、実際に現場を体験し、交流を進めています。コラボレーションは、「異なる」ものとの協働をめざすものですが、教育学研究科のコラボレーションセンターでは、空間的にも広範囲の交流を実践しているのです。

コラボレーションセンターは、学問領域を超えて、学校を超えて、国を超えて、実践が行われてきました。そのなかでの困難さや、それゆえの実りの多さについては、【コラム】において、紹介されています。また、そのなかで、大下卓司は、『教育実践コラボレーション・センターにおける一大学院生の成長』として、この実践活動のなかで大学院生として

成長した点について、報告しています。教育学研究科は、教育のことを考え、研究するところですが、多くの研究科と同様、一研究科として、大学院生の教育に携わっています。つまり、私たちがめざしている「子どもの生命性と有能性を育てる教育」という命題を実践する、まさに足元のフィールドなのです。いくらこのテーマで研究や実践が行われていたとしても、おひざ元の我が教育学研究科の院生が、元気を失い、学問への情熱を失っている、元も子もないということになります。コラボレーションセンターの活動には多くの大学院生が関わり、また、講座を超えて交流しています。それができるフィールドが提供されたことは、とても意義深いことのように思われます。

さて、西平直は、『ジェネレイショナル・サイクルー先行世代との円環・後続世代との円環一』と題する、興味深い論考を展開しています。「教育」は、「教える」と「育てる」の両者からなりたっていると言われますが、西平の論考からは、「育てる」ということの相互性について、深く考えさせられます。一人で、「育てる」ということは、ありえない。それは必ず「育てる一育てられる」という関係のなかに実現し、また、その担い手は、時とともに変化していくものなのです。西平の論考は、さきほどの「国を超えて」という、空間的な飛躍とは別の、「ジェネレイショナル・サイクル」という、「時を超えた」コラボレーション、そして、その円環を示しています。

大山泰宏の『食卓の崩壊という幻想』という論文も、とても興味深いもので、はっと目を覚まさせられるような、鋭い論考です。大山は、「日本の食卓が崩壊している」という、いまや私たちがあたりまえに信じてしまっている言説をとりあげ、「日本の食卓は本当に、崩壊しているのでしょうか」とあらためて問い直しています。大山が言う「教育や子育て・子育てに関する言説は、いつの時代でも危機意識に満ちているものです。このままでは、若者と国家の将来を憂えるという言説は常套句でさえあります。しかし、そこで『危機』や『問題』として定義されることが、決して妥当でない例も、振り返ってみれば多くあります。今、子育て・子育てや教育が危機に瀕するほど日本の食卓が崩壊しているかどうかは正確には分からないにしても、それを前提として信じて性急に対策を講じる前に、少し俯瞰的に眺めてみる必要があるのではないのでしょうか」という指摘は、「問題」に性急にとびつき、それに振り回されてしまう我々への警鐘として、耳を貸すべきだと思います。

さて、吉田正純『「いなか」をとり戻すー野殿・童仙房という「教育空間」』、渡邊洋子『「祭り」という文化伝承・継承空間』は、教育「空間」を視野に入れた論考であり、また、これまでコラボレーションが継続して実践してきた、野殿・童仙房地域での活動を紹介したものです。「生命性と有能性を育てる」とは、どのようなことか、何をすればいいのか、という「論考」だけではなく、「実際にやってみる」ことから得られた知識や反省、気づきは、命題への取り組みに欠かせないものです。本報告書にある、「実践報告」や感想・気づきは、今後のコラボレーションの活動にとって、貴重な示唆を与えるものだと言えるでしょう。

こんな短い字数の中では、本報告書の内容を説明し尽くせません。いかに、バリエーション豊かで、中身の濃い、実践に根差した議論が展開されているか、ということが少しでも伝わったでしょうか？

どこから読んでいただいてもかまいません。興味のあるところからお読みいただき、なんらかの想いを受け取っていただければ幸いです。

教育実践コラボレーション・センターの活動はこれからも続いていきます。今後とも、コラボレーションセンターへのご理解とご指導をたまわりますよう、切にお願いいたします。